

鷹の目の狩人

VI

地域活性化に思うこと

しろはく古地図と城の博物館富原文庫

代表 富原 道晴

企業人である時は組織人、経済人として、組織を通じて、業界の活性化と人材養成をすることで、社会貢献ができます。組織人として、置かれた立場を全うすることが経済社会を動かし、未来を構築します。さて、私は企業人を卒業して以来、きわめて多忙です。24時間マイタイムという恵まれた状況の中で、社会のために何ができるか。生きることの証はなんだろうかと考えた時に、基本が経済人と違わないことに気がきました。どんな立場でも今、自分にできることをするという事です。4月27日から開催中の会津若松城下絵図展も、当初の単なる屏風と会津の紹介から、戊辰戦争による斗南藩設立に至る苦難の道、壊滅した会津を直視し、その力強い再生を見つめることとし、展示趣意書を以下のように作成しました。

「八重の桜が放映され、東日本大震災による荒廃した東北を元気づけています。山本八重が生まれた美しい会津、そして、激動の時代、日本を支えた会津の心、又、再生復活した美しい街並みに感動せざるを得ません。

幕末300近い藩がありながら、はるか東北の会津がなぜ、義に生きた会津魂に思いをはせ、その根源に追ってみました。発端は昨年の会津若松城下屏風の発見に始まります。この屏風は唯一年代の明確な会津若松城下町屏風です。筆者は咬齋清光、43歳の会津藩町絵師です。嘉永4年1851年八重の桜がスタートする年代です、会津戦争で壊滅する寸前の美しい

会津が記録されています。東北の鎮城、会津若松城、郭内の武家屋敷、郭外の城下町、郊外の風景、まず、会津の原風景、八重の生きた時代をご覧くださいます。

幕末、国難の時代に国家的視野で日本を救った会津、会津の長沼流兵法、西洋砲術、山本覚馬と八重の舞台を資料で探り、房総半島や品川台場、さ



移築された本丸3階櫓

らに、蝦夷地の防衛と会津藩の軌跡をたどります。戊辰戦争の引き金となる、大坂城代の上席で、幕府の重責である京都守護職着任から、会津戊辰戦争までを錦絵で再現、戦争の荒廃と、斗南藩移住による廃墟となった会津を直視します。

荒廃を確認した上で、会津の再生と復活を明治以降の多くの地図、鳥瞰図、版画で見ることで、復活への力強い足並みを御案内します。そこには、東日本再生の逞しい会津魂が見えてきます。頑張れ東北、そして会津と願わざるを得ません。ここ安中は八重の夫、安中藩士新島襄ゆかりの地です。全国の地域活性化を目指す富原文庫も安中に移設して4年余になり、安中市とのコラボによる、アイラブ安中を目指していました。ここに八重の桜と同時に、会津城下町屏風展を開催できたことに、新島夫妻の縁を感じます。又、昨年、富原文庫で長野県城絵図展を開催した伊那市は会津松平家藩祖保科正之が藩主であった高遠城の所在地です。当時の現地調査の様子は各紙に報道されました。安中、会津、伊那、日本は狭いと感じます。各市の今後の発展、東北復活を祈り、企画展を開催します。」

伊那の展示会は未知の古城の発見に繋がりました。高遠城跡の整備も進んでいるようです。この展示会が更なる会津城下町研究の礎となることを願い、様々な立場で東北復興に努力された各位に敬意を表します。



会津若松城復興天守

CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH